

いつも ちかくにいるよ

神田美子(京大病院小児科ボランティアグループ「にこにこトマト」)

「にこにこトマト(にこトマ)」は、1995年から京大病院小児科に入院中の子どもとその付添家族に、平日のほぼ毎日、週3～7回、「楽しく豊かな時間」を運ぶボランティアグループである。2010年度の登録メンバーは、男性5名を含む10～70歳代の81名である。

メンバーは、個々の希望により、半数が、たとえば、「宇宙とあそぼう<黄華堂>」や「おはなしのさんぽ道」と個性的な名前のつけられた23ほどの定例会に1～4人で属し、残りの半数は、主に活動の周辺や底辺を支える音訳テープやフリーというグループに属している。

この登録メンバー以外に、催しのゲストが加わり、また大学生や見学者も日常的に多いので、病棟では、月に50～80人がごく自然に出入りしていることになる。

そのような私たちが、病棟で、いつの間にか「にこトマさん」と呼ばれるようになって久しい。個人の名前でなく、「にこトマさん」と総称されるのは、活動が病棟内でなんらかの役割を果たしている、と認識されているからであろう。「『にこトマさん』ってボランティアなのですってね」と付添家族の方に驚かれて、名前が先行して浸透していることに苦笑することもある。

「にこトマ」は、患者やその家族でも医療者でもなく、あらゆる病院内で職業を持つ人たちとは異種類である。病院に役立つのを第一の目的とせず、見舞客と同じように、自分が訪れる相手が自分を望んでいるだろうから、と外から病院に「やってきている」のである。

むろん、見舞客とは違い集団を対象とした活動があり、どの個人とも平等に接し、配慮はしても病気を中心に置かないのではあるが。個人とは必ず一定の距離を保ちつつ、私たちは、「子どもはおもしろい」「今日も楽しいことが起こりそう」「めずらしい体験をさせて、びっくりさせてやろう」とワクワクして今日も病院に通っているのである。

活動は、これまでさまざまなことばに置き換えられてきた。

(1) 「風」

決して個人にまわりつかず、人の気分を和らげて去っていく。社会の動きや空気を病院に運び、また病院が必要とする事柄を社会に知らせるパイプ役を果たす。また、活動で人と人が出会うことが、病棟の人間関係を作るきっかけとなる。

(2) 「町の人」「環境」

医療スタッフと付添家族という少数の価値観の中に、異種類の大勢の価値観が混ざる。

入院の目標はあくまでも病気の治療であるが、入院生活の面では、成長のための

環境も大切であることを自然のうちに伝える。

(3) 「生活の一部」

日常的な活動を予告するため、生活時間の目安となる。「待つ楽しみ」の提供。特に学齢期以下の子どものにとっては、生きがいや集団生活を学ぶ場にも捉えられている。

(4) 「応援団」

病棟でボランティア同士、ボランティアと医療スタッフ、ボランティアと患児や家族との協働により

楽しい「雰囲気」が盛り上がる。治療のみが優先されがちな病院内で、医療スタッフやボランティアが生活面で協働することは、「子どもの笑顔のため」と一致団結することである。子どもは、自分たちのための協力関係から、楽しみと信頼や安心を得る。応援団が控えていることで、安心してのびのびできるのは大人も子どもも同じである。

病気の子どものついて、その苦痛が早く去りますように、子どもが子どもらしく幸せでありますように、と望まない人はいない。しかし、立場によって、目の前の子どもを幸せにする方法はそれぞれである。

医療スタッフは治療を主眼として。

家族は子どもの辛さを共にし、あるときは寄り添いつつ医療への協力も惜しまない。

「にこトマ」は、医療と離れたプレイルームという空間で、子どもや家族への「楽しく豊かな時間」を提供し、病気の子どもの本来の子どもらしさを発揮できるように、とその成長発達を見守っている。病棟から「にこトマさん」と呼ばれるように、私たちが子どもを個別でなく、「子ども」という単位で、ものごとをいつも考えている。「子どもにとって、これはどちらがよいのだろうか」というふうに。

この独特な関係は、医療スタッフ、病院事務スタッフ、その他の職種のスタッフたちとも同様である。病院のあらゆる人々と「にこトマ」は一定の距離を保ちながら、しかし冷ややかすぎない、という位置にいることを選んでいるのである。

評価を期待しない。手を煩わせない。批判しない。頼らない。呼ばれれば応え、迫らない……

「にこトマ」は、「いつもちかくにいるからね」と子どもや家族にはもちろん、医療・事務などのスタッフにもこのような態度をとっている。

活動は、病院の事情により、形態はさまざまである。しかし、どんな独自の事情に合わせた活動でも、病院の誰のどこに偏るのでもない位置を貫き通すことは、案外、活動の充実や存続に大きく影響するのである。病棟を流れる今この瞬間が楽しく豊かなものであるように、と静かに着実に活動していれば、奇跡のような情景は自然に出現するのである。

「宇宙であそぼう『黄華堂』」では、夜間で閉鎖され消灯された廊下を子どもたちがコワゴワ通り、また空調も電気も止まったコーナーで観望会。プレステを使った宇宙旅行と称するゲーム、空気で膨らませたドームの中ではプラネタリウム。病院はこの会を静かに見守り、新しい体験は、子どもたちの「良い」入院の思い出になることだろう。

私たちを含めたすべての人の「今」が充実すれば、病院とボランティアのお互いの信頼は自然に築かれると信じていたい。



図1 にこにこトマトの定例会。おはなしの会、手芸、工作、実験、音楽、子ども文庫(移動図書)など、多くの種類がある。それぞれに「やかまし村のおはなしの会」「紙芝居カチカチ座」「墨あそび」など、楽しい名前がついている。



写真1 「宇宙であそぼう『黄華堂』」のプラネタリウム。空気で膨らませたドームの中で上映する。



写真2 『黄華堂』の観望会へ参加するため、夜間閉鎖され消灯された廊下を通る子どもたち。

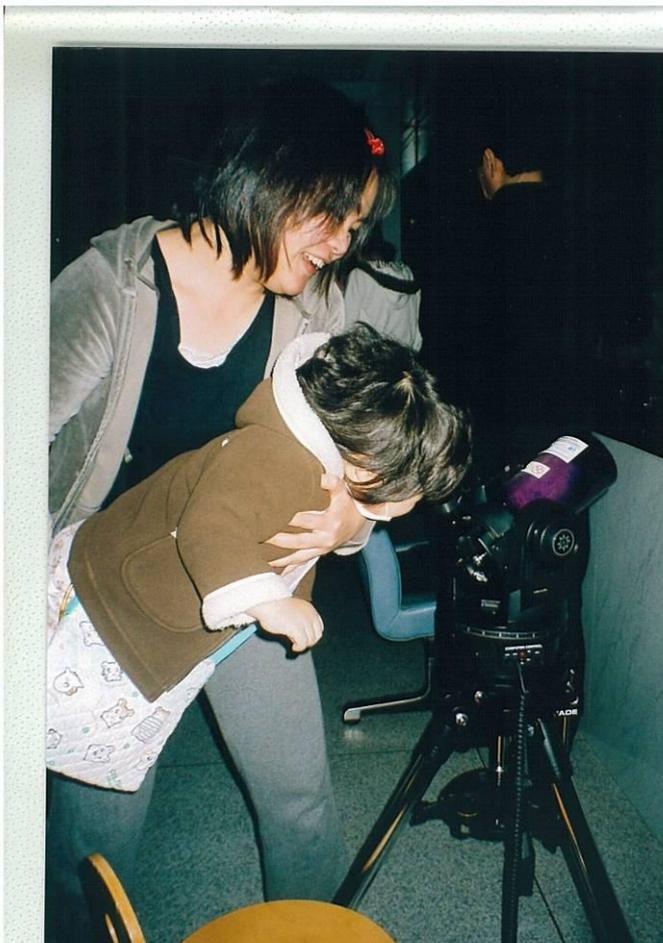


写真3 観望会で望遠鏡をのぞき込む子ども。



写真4 『かみしばいカチカチ座』による、紙芝居ショー。